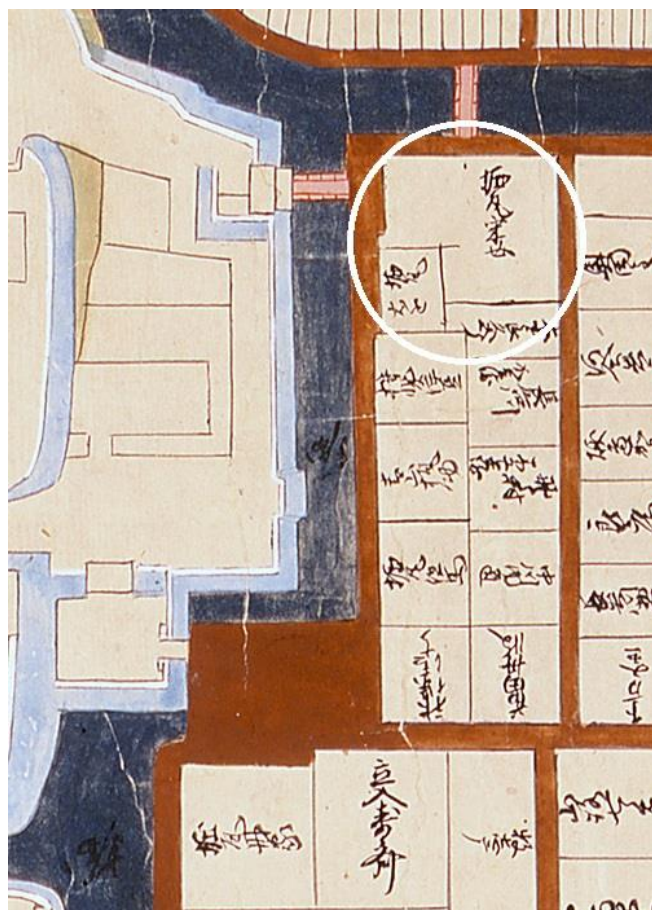


調査コラム第 41 回「御仕置・堀尾采女について」

(松江城部会長/西尾克己/2024 年 3 月 19 日記)

はじめに



松江城を築いた堀尾吉晴とその孫で城主となった堀尾忠晴については平成 19 年から始まった開府 400 年祭以降によく知られるようになった。一方、家臣については堀尾家の改易に伴い 20 年程で松江の城下から去ったため、彼らの足跡はほとんど残らず、後世に語られることはなかった。

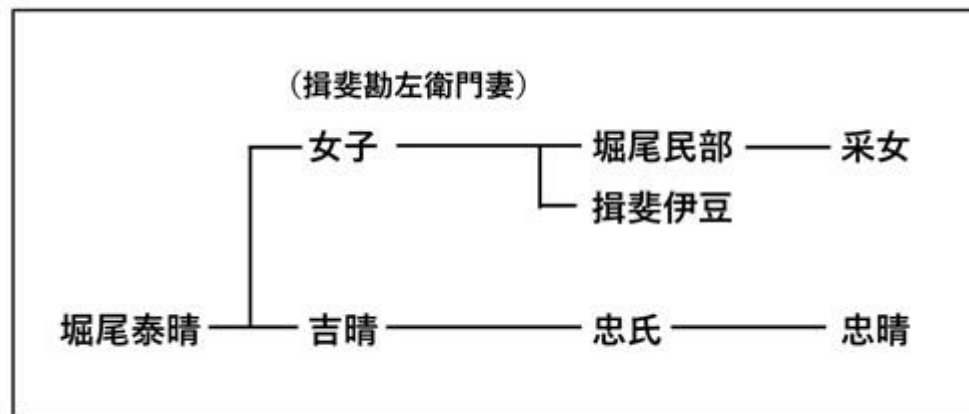
二代藩主忠晴の家臣については、寛永 10 年（1633）の「出雲・隠岐堀尾山城守家中給知帳」（京都・春光院蔵）と「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）により禄高と屋敷地の場所は知られる。しかし、それ以外のことはほとんど分かってはいない。その中で、行動が追える人物としては「堀尾古記」を残した堀尾但馬（たじま）方成がいる。但馬はその後、松平直政に仕官し、松江に住み続けた。

また、限られた史料と発掘資料で行動と生活が知れる家臣として、現在の松江歴史館の場所に屋敷を構えていた堀尾采女（うねめ）一明（以下、采女と記す）が挙げられる【図 1】。采女は最期を江戸で迎え、今も墓石が文京区千駄木にある養源寺に残っている。以前、その墓石調査に関わったこともあり、「堀尾古記」や墓石銘から采女の改易前後の行動と、松江歴史館建設に伴う発掘調査で見つかった遺構、遺物から松江での暮らしぶりを少し述べてみたい。

【図 1】「堀尾期松江城下町絵図」より、堀尾采女、右近屋敷（島根大学附属図書館蔵）

堀尾采女(?～1644 年)

江戸時代初期の松江藩主堀尾家の重臣。生国や生れた年などは不明。堀尾吉晴の甥。藩政を担った「御仕置」に就いた揖斐宮内(いびくない)(後に堀尾民部と名のる)の子で、2代藩主堀尾忠晴に仕える。父の民部の跡を継ぎ、家禄は家中でナンバー3にあたる4000石取である。屋敷は内堀沿いで、松江歴史館がある場所に所在した。父と同様に重臣であり、「御仕置」の職に就き、寛永10年(1633)の改易時の処理にあたった。その後、正保元年(1644)5月19日に江戸で死去。堀尾家菩提寺の養源寺(江戸時代に湯島天神から現在地に移転)に葬られた。系図によると右近という弟と、2人の息子が知られる。



堀尾家系図 (『断家譜』巻4「堀尾(高階)」の項より)

【年表】堀尾家の動向と堀尾采女の経歴（「堀尾古記」より）

西暦（和暦）	事項
1600 年（慶長 5）	関ヶ原の戦い後、堀尾忠氏は出雲・隠岐を領し、父吉晴と富田城に入る。
1604 年（慶長 9）	堀尾忠氏死去し、子の忠晴が跡を継ぐ。
1608 年（慶長 13）	富田から松江に移る。（松江越）
1611 年（慶長 16）	松江城天守できる。6 月 17 日、堀尾吉晴死去 堀尾民部（采女の父）が「御仕置」になる。
1615 年（元和元）	大坂夏の陣
1620 年（元和 6）	堀尾民部死去。報恩寺の「過去帳」に「采女ちち」とある。
1623 年（元和 9）	備前国見廻り。藩主忠晴の御供（堀尾但馬、堀尾采女）
1626 年（寛永 3）	堀尾采女、「御仕置」になる。
1633 年（寛永 10）	9 月 20 日に藩主忠晴死去、堀尾家改易 屋敷を 11 月 3 日に明け渡す。
1634 年（寛永 11）	采女等、重臣 6 名が 6 月に大坂を経由して高野山に参る。 （忠晴の供養と堀尾家再興の祈願のためか） 采女、12 月に江戸に向かう。
1644 年（正保元）	采女、5 月 19 日に江戸で死去。（石塔銘より） 堀尾家菩提寺の養源寺に埋葬される。

1. 江戸・養源寺にある堀尾氏と采女の石塔



養源寺は臨済宗の寺院で、現在は文京区千駄木にある。春日局の子稲葉正勝が開基で、大名・旗本の墓も多い。堀尾氏の菩提寺でもあるが、現在残る堀尾氏の墓石は5基【図2】。墓石の形式は4基が宝篋印塔（ほうきょういんとう）で、残る1基は無縫塔（むほうとう）である。彫られている法名と歿年より該当者は、規模の大きい順で石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）、堀尾忠晴、松村監物、堀尾采女、堀尾式部となる。石川廉勝妻は堀尾家改易後の墓地を維持した伊勢亀山藩主の妻である。また、松村監物は忠晴に殉死した小姓で、同じ墓地に埋葬された。

【図2】 堀尾氏に関わる石塔群

（左から堀尾式部、堀尾忠晴、石川廉勝妻、松村監物、堀尾采女石塔）

年代が新しいのは貞享5年（1688）6月2日に死亡した堀尾式部（勝明）の墓石である。式部は石川廉晴の子憲之の三男で、忠晴の曾孫にあたり、5代将軍綱吉の時に式部は旗本に取り立てられた。堀尾家は短期間ではあったが再興された。その後ほどなく式部は28歳の若さで病没した。式部にも嗣子がなく、堀尾氏は再び改易となる。以上の経緯から、式部も堀尾家の一員として、その墓石が養源寺に存在する。

采女の石塔は小さいが、今も墓石列の端に置かれている。基礎の側面には「堀尾山城守内/堀尾采女一明」と彫られ、堀尾家の家臣であることを示している。また、「御仕置」を務めた采女は亡くなるまでの10年間、石川家や奥平家を通じて幕府に働きかけをしていたと想像される。残念ながら

ら、生前には堀尾氏再興はかなわなかった。このことを裏づけるものとして、石川家が提出したと考えられる堀尾家系図（『断家譜巻』4「堀尾（高階）」の項）があり、その系図には吉晴の姉（揖斐勘左衛門の妻）の子・孫として民部と伊豆の兄弟と共に民部の子采女の名が載る。

2. 玉湯・報恩寺の堀尾忠氏と民部の石塔

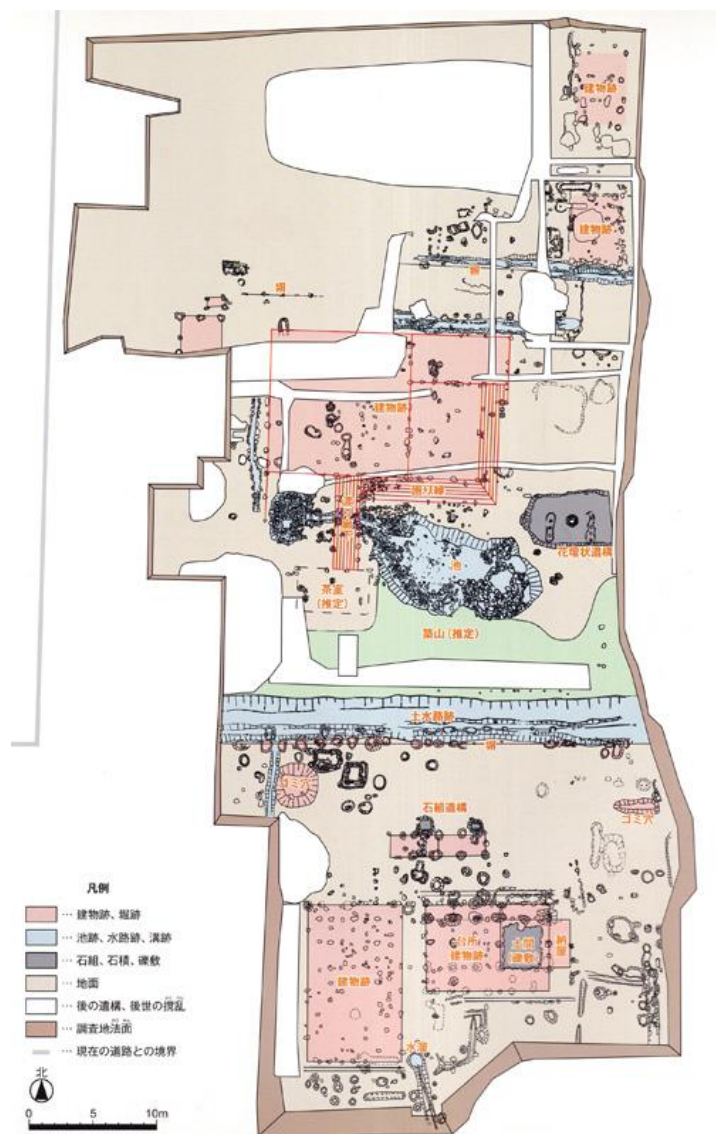


民部の石塔が松江市玉湯町湯町にある真言宗の報恩寺にある【図3】。来待石からなる石廟が存在し、内部には小型の宝篋印塔1基が置かれている。この石廟の外面には民部の法名である「實山栄真大居士」の文字が多数彫られ、寺の過去帳には法名とともに、没年月、「堀尾山城守家臣」、「采女ちち」と書かれている。報恩寺は民部の菩提寺でもあった可能性があり、『雲陽誌』には采女が般若経一部を寄進したと記されている。父をはじめとする先祖の追善供養と一族の現世安寧とを祈念するためのものであろう。

【図3】 報恩寺の堀尾民部石廟と石塔

報恩寺の位置は松江城からすると南西方向であり、裏鬼門にあたる。また、境内には堀尾忠氏の石塔とされる大型の宝篋印塔が建つ。『雲陽誌』には、堀尾家の祈願所であり、忠氏の妻（長松院）が本堂内陣を飾る華鬘（けまん）を寄進したこと、忠晴が摩利支天（まりしてん）堂を建立したこと、寺宝に忠晴の守り本尊である摩利支天の小像があることなどが記されている。

3. 発掘調査から見える采女の暮らし—庭園と「茶の湯」を嗜んだ道具類—



堀尾采女の屋敷は「堀尾期松江城下町絵図」を見ると、松江歴史館とその東側一帯であり、松江城の北東部にあたる北惣門橋東詰めの広い範囲に存在する。また、その南側に隣接する場所（歴史館の南側）は500石取りの采女の弟堀尾右近の屋敷である。歴史館の建物部分の発掘調査が平成18年～同20年に行われ、采女の屋敷では規模の大きい礎石建物跡と大型の瓢箪形の池跡が検出され、右近の屋敷では礎石建物跡が発見されている【図4】。采女屋敷の建物は門の位置と池の配置さらに規模から客間と考えられ、池をもつ庭園と松江城の天守が展望できる。

右近屋敷の建物は規模が大きく、門の位置より屋敷の中心となる主屋と推定される。采女兄弟の屋敷を裏付ける遺物としては桔梗紋をもつ瓦が出土している。この桔梗紋は揖斐家の家紋である。もともと、堀尾采女の父である堀尾民部は揖斐宮内を名乗っており、美濃国揖斐に出自をもつ武士であろう。

遺物の中で注目されるものとしては「茶の湯」に関わる茶陶がある。采女と右近の屋敷地からも瀬戸・美濃焼の碗や懷石に使う唐津焼の向付（皿）などの陶磁器が出土している【図5】。また、右近の屋敷跡からは織部焼の茶碗をはじめ、唐津焼や志野焼の向付も発見されている。

【図4】発掘調査地の平面図（堀尾期）、『雲州松江の歴史をひもとく』より転載



【図 5】松江城下町遺跡から出土した茶陶、安土桃山～江戸時代初期（松江市蔵）、
『松江城大解剖』より転載

おわりに

堀尾采女は江戸時代初めの堀尾家の重臣で、改易時に家臣トップの「御仕置」に就き、御家再興に尽力したことは「堀尾古記」で知られる。しかし、生前には堀尾家の再興は叶わず、死後 30 年を経て短期間ではあったが再興された。前述のように、堀尾家の墓地を維持していた石川家は堀尾家改易後の 10 年間に、采女が幕府へお家再興の働きかけたとことを考慮し、養源寺の堀尾家墓所に墓を建てたのではないかと思われる。このことについては、墓石銘の「堀尾山城守内」からも想像されるのである。

最後に、松江での采女の暮らしについても触れておこう。采女と弟右近の屋敷と推定される松江歴史館敷地内での発掘調査において、大きな礎石建物に伴って多くの陶磁器が出土している。その中には、江戸初期に流行った美濃焼、織部焼の高価な茶碗類や唐津焼、備前焼の茶道具が多く見受けられ、采女の兄弟は普段から「茶の湯」を嗜んでいたと考えられる。また、他の屋敷でも茶陶類が出土しており、松江の城下町では江戸時代初期より茶文化がかなり浸透していたと考えられる。

参考文献

- 玉湯町 1982『玉湯町史下巻（1）』
- 佐々木倫朗 2007「出雲・隠岐堀尾山城守家中給知帳」『松江市歴史叢書 1』松江市教育委員会
- 松尾寿 2008『松江市ふるさと文庫 5—城下町松江の誕生と町のしくみ—』松江市教育委員会
- 新庄正典 2012「松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について」『松江歴史館研究紀要第 2 号』松江歴史館
- 松江歴史館編刊 2016『雲州松江の歴史をひもとく—松江歴史館展示ガイド』
- 松江歴史館編刊 2020『松江城大解剖—城郭そして城下町』展図録
- 松江石造物研究会編集 2021『堀尾吉晴共同研究会報告書—近世大名・堀尾吉晴とその一族の石塔—』堀尾吉晴共同研究会（松江市・安来市・大田町）
- 『松江歴史館整備事業 松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）発掘調査報告書』島根県松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団